

最終章
未来ノ約束
【音二郎／明治エンド】

門をくぐると、朱色の本堂の真上に赤い満月が昇っていた。まるで月の光そのものが、本堂を朱に染めているようにも見える。本堂の両脇に鎮座するのは、狛犬ではなく狛虎だ。なんでも毘沙門様は寅の年、寅の日、寅の刻にこの世に降臨されたとかで、この狛虎はそれにちなんでいるらしい。

——私は誰かを探していた。大切な約束を果たすために。

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

でも、まさかここで会えると思わなかった。いくらチャーリーさんの格好は悪目立ちするといっても、こんな人混みのなかではさすがに見つけづらいと思ったから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ」

「でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

(あ……)

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

(違う、そうじゃないの。チャーリーさん)

私はただ、人の流れに飲み込まれてしまったただけだ。でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？　君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいたって言ったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

（じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？）

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

――赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

ドン、と肩に衝撃を感じて我に返った。思わずよろけそうになったところで、誰かが私の身体を支えに回る。

「おい親父、どこ見て歩きよつとやコラア！」

どこの方言なのか、すぐ頭上で威勢のいい声が飛んだ。

「おい貴様、ぶちくらすぞ！」

(え?)

私の両肩を押さえながら、通りすがりの男の人に怒声を放っていたのは、音二郎さんだった。

「ったく、ろくに前も見ねえで体当たりしてきやがって。縁日の楽しい気分がだいなしだぜ。おい大丈夫かよ。怪我はねえか？」

心配そうに私の顔を覗き込む彼と、その背後に広がる縁日の風景。

さつきまでチャーリーさんと一緒にいたはずなのに、なぜか今、私は音二郎さんと2人である。

(あ……)

仰ぎ見た空に昇る月。朱色に染まるその月は、満月ではない。わずかに削げたいびつなかなたちだ。

さつきまで完全なる満月が、闇夜に赤く滲んでいたというのに。

(どういうこと?)

ただわかるのは、いつのまにか満月の夜は過ぎてしまったということ。そして私は――。

どうやら現代に帰るタイミングを失ってしまったらしい、ということ。

「ぼんやり月なんか眺めちまってさ。まるで竹取物語だな」

からかうように言い、音二郎さんは隣に立つ。

「かぐや姫は、満月が近づくと泣くんだよな。その夜に月の都から迎えが来るから、帰らなきゃなんねえってさ」

「……………」

満月の夜、私を迎えに来てくれたはずの人はどこに行ってしまったんだろう？　ひと言くらい挨拶してくれてもよかったのに、彼は気配すら残してはくれなかった。

『幸せになるんだよ、芽衣ちゃん』

それともあの言葉が、最後のあいさつだった…………？

（教えてよ、チャーリーさん）

この時代に取り残された私は、どうすればいいんだろう。この結末は、私自身が望んだも

のなの――？

(あっ)

すると、ぴよこんと私の足元に見慣れた白いウサギがやって来た。長い耳に真っ赤な眼。私を見上げて小さく跳ねる。突然の来訪者に、私は驚いて立ち止まった。

「よう！ 鏡花ちゃんじゃねえか」

「……はあ。またあんたたちかよ」

げんなりとした声で答えたのは、鏡花さんだった。彼も縁日に来ていたようだ。

「またとはなんだよ、またとはよ。近所なんだからしよっちゅう顔合わせるに決まってるじゃねえか」

「顔合わせてもいいけど、いちいち話しかけるなって言ってるんだよ。あんたが元気なのは見りゃあわかるからさ」

そう不機嫌そうに言ってから、鏡花さんは私を見る。

「……ねえ、あんたさ。本当に川上でいいのかよ？」

「えっ」

「こんな厄介な男でいいのかって聞いてるんだよ。自分勝手だし無鉄砲だし、一生振り回されると思うけどね。平穩よりも刺激が欲しいっていうなら、まあ好きにすればっ

て思うけどさ」

「おいこら！ なにいきなり現れて冷静に指摘してんだよ」

「近所のよしみで忠告してやってるんだよっ。別にこの子が苦労しようがなんだろうが、僕には関係ないけどねっ」

「関係ねえなら口出すな、このクソガキっ！」

「なにムキになってんだよっ。あんたってさ、おとなげないおとなの見本だよね！」
(また始まっちゃった……)

白ウサギは素知らぬ顔で、夜空の月を見上げている。長い耳をすすきの穂のように揺らして、満月になりそこねた、不完全な月を。

*

……置屋の窓の向こうから、かすかな祭り囃子が漏れ聞こえてくる。お祭りが終わる間際はきまって寂しくて、私はひざをかかえたまま外の気配に耳を傾けていた。

「——なんだ、家が恋しくなっちゃったか？」

音二郎さんは私の隣に座り、優しく頭を撫でてくる。私はうつむいたままかぶりを振

った。

(恋しいものにも、私は自分の家なんて知らない)

最寄り駅も住所も家族の顔もろくにわからないのに、家を恋しく思う資格なんてない

「私には帰る家もないし、迎えに来る人もいません」

(……子どもみたいな言いかた)

これではまるで、誰か迎えに来てくれる人を待っているみたいだ。

「……そっか。だったらよ」

音二郎さんは私を軽く抱き寄せ、耳元で囁く。

「持ち主が現れねえんじや、拾ったやつのもことになるしかねえ。そうだろ？」

(音二郎さん……)

どきりと胸が疼いた。手のひらがじんわりと汗ばむ。

「そうだ、って言えよ」

やわらかく髪を梳く、大きな手。その手が私の頬を包んだ。

「……なあ。俺のものになる、って言えよ」

音二郎さんの熱い息が耳元にかかった。もうそれだけで身動きができなくなる。

「そうしたら俺は、誰がおまえを迎えに来ようが絶対に渡さねえんだ。……おまえが

俺のものになるって、決めてくれたらさ」

いつもと同じ口調なのに、どこか懇願するようにも聞こえるのはなぜだろう。

「っ……」

そんな不思議な思いで、私は音二郎さんの口づけを受けた。

ただ唇と唇が触れ合うだけなのに、意識が乱れて呼吸すらままならない。

祭り囃子も風の音も、もうなにも耳に入らない。

聞こえるのはやたらとせわしない自分の鼓動だけだ。

「……そんなに震えんなよ。なんだか俺が、悪いことしてるみてえじゃねえか」

くすりと、自嘲気味に音二郎さんは笑った。

「ま、いいことではねえよな。自分の部屋にこんな若いの住まわせて……挙げ句の果

てには手エつけてさ」

「……っ、……」

首筋に軽く歯を立てられ、喉からおかしな声が出てしまいそうになる。背中に一筋の汗が流れていくのを感じた。

「……その上、かつさらおうとしてるんだからな。まったく褒められたことじゃねえ。

女将が聞いたら卒倒するだろうよ」

「かつさらう、ってどこに……？」

「どこだと思う？ まあ、浅草でもなきや上野でもねえことはたしかだ。ちなみに博多でも大阪でもねえぜ」

「……？」

「そうだな。おまえが考えもしねえようなところだ。いつ旅立っても大丈夫な準備はできてる。……あとは、おまえの返事を聞くだけだ」

強く抱きしめられて、私は細く息を吐いた。この人ほど一緒にいてドキドキする相手はいないのに、この人ほど一緒にいて安心できる相手もない。矛盾しているようだけど、その両方をくれる人だからこそ囚われてしまった。いつから惹かれたのか、思い出す余裕もないまま。

「俺と一緒に来いよ。見たこともねえ場所に連れて行ってやる」

まっすぐに私の目を見て、たしかな自信とともに彼は言った。

「……過去のことなんざどうでもよくなるくらい、すげえ未来を見せてやるからさ」
指と指がからまる。頬と頬が触れ合い、承諾を求めるようにゆっくりと唇が押しあてられる。

(過去のことなんて、どうでもよくなる?)

私は心のなかで問いかけた。

(もし私が、すべてを思い出しても……?)

それでも後悔はさせないと、音二郎さんなら言ってくれるんだろう。未来を見すえる音二郎さんのまなざしには迷いが無い。彼は背負った荷物が重ければ重いほど、振り返らずに前を向いて進むうと思える人だ。——果たして私に、そんな人の隣に立てる資格があるのかどうかはわからないけど。

「一緒に行きたい。音二郎さんと一緒に」

連れて行ってもらうのではなく、隣で並んで見に行きたい。私が置いてきた未来の景色を、音二郎さんと2人で並んで、手をつなぎながら。

「——言ったな？」

そのときの音二郎さんの表情を、私はずっと忘れないだろうと思った。自信に満ちあふれているようでいて、それでいてどこか安堵したようにも見えて。

念を押してほしそうに上がる語尾が、なぜか彼の中にある小さな不安を示しているように、と勝手に愛しくなった。

「……ううん。まだ言っていないですよ」

「あ？」

(私は、音二郎さんのことが好き)

まだ告げていないその言葉を口にしたら、この人はどんな顔をするんだろう——？
そう思いながら、私はゆっくりと口を開いた。

*

「しっかしい天気だぜ。まるで神様が俺たちの門出を祝福してるようじゃねえか」

「……ねえ、何度も同じこと聞くようだけどさ」

「あ？」

「あんたたち、本当にアメリカに行くの？」

鏡花さんはいつものすました顔で言葉を紡いだ。

——そう。音二郎さんと私は、これからアメリカへ向かう。新橋から横浜の港に行き、
そこから船で海の向こうに旅立つ予定だ。

「あつたりまえだろ。もう荷物も積んだし、劇団の連中も船に乗り込んでんだ。あとは
俺と嫁さんが船に乗るのを待つばかりなんだよ」

「嫁さん、ね……」

鏡花さんは、怪訝そうに片眉を上げた。

「こんなに無鉄砲な男と一緒にいる人の気が知れないよ。頭がどうかしてるんじゃないかなあ。ねえ、あんたもそう思うよね？」

「そうですね」

こんな嫌味も、今では笑顔で受け流すことができる程度には私も成長した。

「そうですね、つて、あんたのこと言ってるんだよつ。まったく、他人事みたいな顔しちゃってさ」

「あんたこれから海を渡るんだよ？ 本当に大丈夫なのかよ。アメリカのことなんてなに1つ知らないだろう？」

「知ってますよ、アメリカのことくらい。自由の女神とか、あとは……」

「自由の女神……？」

鏡花さんはきよんとした。

「おお、よく知ってんじゃねえか。アメリカ独立100周年を記念してフランスから贈られたっていう、アレだろ？ 自由の女神を知ってりゃあ上出来だな。これで海外公演は成功したも同然だ。我が嫁ながら頼もしいぜ」

音二郎さんと私は、顔を見合わせてにつこり微笑みあう。

「どこが頼もしいんだよっ。むしろ不安しかないじゃないか。日本人がいきなりアメリカに押しかけて公演を打つなんて、繊細な僕にはとてもついていけそうにない発想だよ……」

のんきな私たちにやきもきするのか鏡花さんは大げさに声を震わせた。

「おい……俺だって不安だらけだぜ？ でもまあ、行きゃあなんとかなるんじゃないやねえの？」

「その感覚がおかしいって言ってるんだよっ。……でもまあ、別に向こうで大成功なんてしなくてもいいからさ、せいぜい元気で暮らせばいいんじゃない？」

(鏡花さん……)

どこか諦めたような顔で、それでも微笑みで口もとを彩りながら鏡花さんは続けた。

「あんたたちがいない間は静かでもいいけどさ。静かすぎるのも落ち着かないし、アメリカに飽きたら適当に帰ってくればいいよ。その時は、今みたいにわざわざ駅まで出向いてやったりはしないけど。今日は特別だよっ」

「……ありがとな、鏡花ちゃん」

「ありがとうございます、鏡花さん」

「……ふん」

「じゃあ、お達者で」

そう言うと、鏡花さんは私たちに背を向け、名残惜しさのカケラも見せずその場をあとにした。

*

「鏡花さんらしいお別れのしかたでしたね」

大勢の人々にぎわう横浜港。新天地での成功を夢見る人や、外遊に出かけるらしき人の顔は希望に満ちている。

そんな人々と一緒に私たちは船に乗り込んだ。海から吹いてくる潮風は穏やかで心地いい。

「……ああ、そうだな」

「あ、しまったなア。鏡花ちゃんのアメリカみやげはなにがいいか、聞くの忘れちゃったじゃねえか」

「アメリカみやげ……」

その言葉で連想したものを、私はそのまま口に出した。

「アイラブニューヨークTシャツなんてどうでしょう？」

「は？ あいらぶにゅーよーくていーしゃつ？」

「知らないんですか？ 大きな赤いハートマークがかわいいんですよ」

「さあ、聞いたことねえが……ま、今からみやげの心配なんかしたってしょうがねえよな。日本に帰るまでは、まだまだ時間がたっぷりあるわけだし……なあ、聞いてもいいか？」

「はい、なんででしょう？」

私は音二郎さんを見上げた。

「おまえ、本当に後悔してねえのか。この先どうなるかもわからねえのに、俺について来ちまってさ」

「はい……今のところは」

それが正直な気持ちだった。音二郎さんの言うとおり、私たちはこの先どうなるかわからない。不安に思う気持ちがゼロだとは言えなかった。

（だって明治のアメリカがどうなってるかなんて、全然想像がつかないもんね…）

「おいおい、ずいぶんと渋い反応してくれるじゃねえか」

「いえっ、嫌とかそういうわけじゃないですよ？ 音二郎さんについて来たのは私の

意志なんですから」

「ははっ、そりゃあよかったぜ。じゃあおまえも、いよいよ大女優になる決意を固めたってわけだ」

「だ、大女優……!?!? む、無理ですよ、私、お芝居なんてできません!」

「そうか? おまえならいい線いきそうな気もするけどな」

私はぶんぶんと首を振った。裏方の仕事を手伝うことぐらいならできるだろうけど、お芝居なんて絶対無理だ。でも音二郎さんは、そんなふうになくなっていく私を、どこか楽しげに眺めている。

「はは、まあそれはそれとして、だ。……俺は、おまえがついて来てくれて、嬉しかったんだ。おまえがなにもかもを捨てて……俺を選んでくれたってことがさ」

私の瞳を覗き込みながら、彼は頬に手をのばしてくる。

「……………」

指先が触れ、私の身体がぴくりと跳ねた。そんな私の反応に、音二郎さんはくくつと喉の奥で笑う。

「……ほら、もうすぐ出航だ。不安は山ほどあるけどよ、俺はそれ以上に楽しみでしかたねえんだ。俺たちの芝居が、世界でどこまで通用するか考えただけでも胸が躍る。それ

に……俺にはおまえがいるからな」

「……………」

「おまえがいるから、俺は無敵になれるんだ。……わかってんのか？」

音二郎さんの強いまなざしにさらされる私は、まだまだ子どもだ。そんな私がこの人の支えになれるのか、今はまだ、自信はないけれど。

「なに下向いてんだよ。……こっち向けて。おまえの顔、見ていたいんだよ」

私の顎に手を添えると、顔を上げさせ、視線を合わせる。

「別にいいだろ、そんぐらい。なにここで襲おうとしてるわけじゃねえんだからよ」

「お、襲うって……………」

こんな昼間っから、いったいなにを言い出すのか。

「お？ 怒ったのか？ じゃあ、怒らせついでに……………」

私の唇に、あたたかくてやわらかいものがそっと触れる。一瞬の早技に、私はそのまま動けなくなってしまう。

「はは、油断したな？ いきなりこんなことされたくなかったら、普段からもう少し

警戒しとけよ。ま、それでも俺はスキをつくから、おまえが警戒したって意味はねえんだけどな」

「なっ……!!」

「なんだよ、いいじゃねえか。好きな時におまえに口づけできる……、それが夫である、俺の特権なんだからさ……」

甘い囁きとともに、音二郎さんの顔が近づいてきて……私の唇に、今度は深く重なった。なんだかんだでそれを受け入れてしまう私。これが惚れた弱みというやつなのかもしれない。

——いつか後悔しても、しなくても。

音二郎さんのいる場所に、私がいる。それだけは事実だ。

「おまえのことは、俺がきっちり幸せにする。そう決めてんだ……ずっと前からな。

……愛してるぜ。奥さん」

） F I N ）